

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成16年
9月号

毎月23日発行
通巻409号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成16年9月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



屋久島最高峰の宮之浦岳 鹿兒島県上尾久町 手塚賢至さん 撮影 (文・6頁)

2003 (平成15) 年10月18~19日

賑栄い塾の記憶 (上) ~いのちのつながりを考える~

於：大倭紫陽花邑

出口三平

はじめに

「三人の会」は、岸田哲さん、野本三吉さん、阿木幸男さんの三人が、一九九六年以来、毎年開いている集いである。「賑栄い塾」はその特別バージョンというような性格のようだ。今回は第八回「三人の会」であり、「賑栄い塾」としては二〇〇〇年十一月について二回目である。前回の「賑栄い塾」は、三人の会の方々にプラスして真木悠介さん、山尾三省さんが参加されている。山尾さんは、翌年二〇〇一年夏に昇天されるが、その原因となった「ガン」を抱えての参加で、記録からはそんな三省さんの息づかいも伝わる。

今回は、三省さん、三吉さんと「三」ちなみで、三平という名の小生が呼ばれたということだ!? 司会も「三」ちなみの林修三さん。私の大親友であり、いづれにしても、うれしいことだった。

そのうれしさは、大倭紫陽花邑という場所にも由来する。霊的に現存される矢追日聖法主の膝下で、出口王仁三郎聖師にも関わる話をする機会が与えられたことへのうれしさやら、すっかりなくてはとの思いがあった。

記録というよりも、私のなかの記憶にしたいと思ひ、「賑栄い塾の記憶」と題して整理する。

出口三平さんのご厚意により、このまゝとめから五人の話し手の(一日目)最初の講演と、(二日目)最後の感想のところを抜粋して、九月号と十月号に分けて掲載させていただきます。(編集部)

岸田哲さんの話から

岸田さんは一九四二年生まれ。一九六〇年、安保闘争で大変なころ、十八歳の岸田さんはワークキャンプ運動を起点に、共同体模索を始めてゆく。イスラエルのキブツに三年間行ったり、「日本協同体協会」で『月刊キブツ』編集などに関わる。一九六七年、二十五歳ころからである。その年の六月に中東戦争が始まり、イスラエル問題が複雑化してゆく頃だ。翌年イスラエルを再訪した岸田さんは、キブツへの疑問も芽ばえることになったようだ。共同体とは何だろうか……と、岸田さんは問いかけを鋭くしながら、日本国内での共同体見学などを始めてゆく。一九七〇年からは「日本の共同体話し合いの会」が発足し、一燈園、山岸会、新しき村、大倭紫陽花邑などで開催されるのに参加。そんな流れのなかで、岸田さんは一九七一年四月に、東京で矢追日聖さんと出会う。

「はじめて会った時に、矢追日聖さんの語る共同体は、それまで私の見聞した共同体とは全然違うのですよね。霊界の話などもあって、本来ならば違和感などあるはずですが、そのときは、スツと入ってきましてね」と岸田さん。

一九七〇年代は、学園闘争（一九六九年一月）崩壊後、アノミー（※社会的無秩序）化が進んでゆく時代である。岸田さんや三省さん、野木さん、真木さん、阿木さんたちは、当時三十歳前後。模索のなかで、歩き出している。

岸田さんは、矢追さんの人柄にも惹かれ、一九七三年（昭和四十八年）十二月に大倭紫陽花邑にはいり、身体障害者療護施設「菅原園」で働きはじめ、その後現在にいたる三十年、大倭を人生のベースにすることになる。

岸田さんは、いわば「神を核とした共同体」のなかに参入されながら、いのちのつながりを考え深めてゆくことになる。

岸田さんの話のなかで、一九六〇年代以前に発した共同体には、田舎に立地し、農業主体の共同体が多かったが、一九六〇年代から七〇年代に発した共同体は、都市型の共同体が多くなったという指摘があった。一九六〇年代後半には、欧米でもその傾向があったという。「農」「生産」を核とする共同体から、都市型の共同体は、なを核としたのだろうか。「消費」だけではなく、ほかになにが求められたのか。

（岸田さんの感想の言葉から）

○三省さんのことを思うことが多かった。一緒にいてくれている感じだった。

○賑栄い塾という関係の場ができ、これからも何らかの形で、たんたんとして続けてゆきたい。

真木悠介さんの話から

龍の共同体 — 生命の地下水脈へ —

I 「イラク戦争」の根源・現代の世界の構図

二十一世紀は、二〇〇一年九月の世界貿易センタービルへのテロから始まり、アフガン戦争、そしてイラク戦争と、混乱から始まった。その混乱の原因は、この千年、二千年間の、文明の根幹に関わるものからでているとの前提で、真木さんの話が展開される。

ヨハネの黙示録は、小アジアで迫害されていたキリスト教徒を慰め励ますために、不思議な終末的ビジョンを書き込みながら、キリストの再来、神の国の到来を予言する文書であった。

黙示録に書かれているバビロンは、世界貿易の中心地であった。経済的にも軍事的にも強大な力

をもっていた。そのバビロンの超高層建造物であるバベルの塔の崩壊と、二〇〇一年九月の世界貿易センタービルの崩壊が相応する。

バビロン崩壊の部分を甘美な思いで何度も反復して読むキリスト教の人々と、今回の貿易センタービル崩壊を歓喜して迎えるアラブの人々が、同位相になっていることが指摘される。いわばヨハネの黙示録をひっくり返したような形になっているというわけだ。

そして真木さんは「関係の絶対性」という用語を補助線的にだしてくる。この言葉は、吉本隆明の『マチウ書試論』にある言葉である。吉本は新約聖書マタイ伝のなかに、ユダヤ教徒への陰惨なまでの憎しみを読み取り、その黒々とした憎しみはどこから来るのかを分析する。「関係の絶対性」という用語もそのなかで使われている。

バビロンやローマの崩壊をキリスト教徒達は喜ぶ。しかしバビロンにもローマにも、いたいけな子供もいるし、善良な人達もたくさんいる。なのに、その人達もほろんでゆくことを、キリスト者たちは喜ぶ。なぜそうなるかというと、そこには「関係の絶対性」という認識があるからだ。

話を聞いての私の理解範囲内で言えば、「大義名分」ということだろうか。大卒の関係性が先行し、そのなかの人達は無視されてしまう。〇〇教は悪だとか、××派は邪霊だとかで、一括処分してしまうというようなことだろう。

そのような関係性を、キリスト教もイスラム教も形成してしまい、今回の世界貿易センタービル崩壊の際も、同じような「関係の絶対性」が、やっばりでてしまっていた。そのような二千年来の問題の根底に、龍の共同体を封じてきた文明の問題があるのでは……と、真木さんの話は展開してゆく。意想外の切り込みに興味津々となる。

II 原蛇征服…文明の原構造

世界各地には、龍退治の神話や伝説が多く残されているが、龍は水と関連する。

龍の退治とは、水に象徴されるみずみずしいのちの文明を押し込んだことを意味している。

水は力オス（混沌）を含む原初的な生命を象徴し、水を大事にする文明は、いのちを生みはぐくむ女性的な原理を持つ。そのような水に象徴されるいのちの世界から男性的原理の世界に転換していった。

いのちの水を忘れ、押し込んだものの子孫たちが、龍退治の神話伝承を残し、三千年来の人類文明を形成してきた。

ペルシャ、バビロニア、ユダヤ、日本などの神話に、同じ構造の、龍（水 根源的な生命性 混沌とした生命性 母性）を押し込んだ話があるとの指摘は、目から鱗という感じであった。

真木さんのヤマタノオロチ論は、ユニークだった。ヤマタノオロチとは、八つの山、八つの谷にまたがる農業共同体、農業連合体であり、各地に点在する部族であったとの解釈だ。それをヤママト朝廷が押しえつけ、支配下におさめてゆくの、ヤマタノオロチ退治神話になる、と。

そして、これは日本だけでなく、ペルシャ、バビロニアなどの龍退治神話にも共通するものであり、散在する農村共同体が統合されてゆくプロセスを神話化したものと、説得力のある論となっていた。

ヤマタノオロチに苦しめられていたアシナツチ テナツチについての解釈も、ユニークだった。「ツチ」は土蜘蛛などといわれるときの「土」で、土着民ということ。

真木さん、「アシナツチ、テナツチから、ツチをのぞくと、アシナ、テナで、足がない、手がない、つまり蛇なんですよね」といって、語呂合わせ的な解釈と思われたのか、強引と思われたのか、早い語りのなかで、一瞬笑っておられた。

大和朝廷に押しえられるのも、助けを求めたのも、蛇であり、つまり水の民というわけである。

真木さんは、ヤマタノオロチのなから出てきた「天叢雲剣」が、天皇の神器となり、大和朝廷の中心的力となったことも指摘する。アメノムラクモとは、雨を降らす力をもつような神器であり、退治したはずの大蛇や悪龍が、かえって王権のパワーとなつていく。法華経の八大龍王も同じ構造をもっているのではないか、との指摘もあった。

このあたりから、話は核心的になつてゆく。都市と農村ということ言えば、都市は文明 CIVILIZATION であり、農村は、文字通り耕すという意味をもつ文化 culture である、と。

水（龍）の上になりたつ農業共同体文化が、国家的な文明に切り替わつていったことに、この三千年の問題があつたということだ。

都市は男性的イメージで、天父神を拝する一神教となり、農業共同体は、地母神を神とする多神教的な世界。前者が後者を支配するようになるという話が、龍退治の神話となつて残されているというわけである。

大きな構図の話で、とても刺激的であつた。

III 龍の共同体

真木さんの「龍の共同体」とは、「瑞々しい豊かな大地に抱かれたいのちの共同体」なんだと、私なりに理解した。龍の世界に関心が向けられ、霊的にも龍たちの動きが顕著になつてきているのは、文明の質的転換期が来ているからだろう。

（真木さんの感想の言葉から）

○「好き」というのは、大事なことだと思う。友

人の論理学者が、人と会うときに必ず「その人はええ人ですか、悪い人ですか」と訊く。それは論理的でないな、という友人もいるが、大事なことではないかと思う。

○法主さまが生きていると感じる。概して初代がなくなると、教団などは駄目になるものだが、ここでは、みなさんの中に、受け継がれているものがある。その意味で、法主さまが生きていると思う。

野本三吉さんの話から

野本さんからは、雑誌『公評』に連載中の「海と島のある風景―南島民俗紀行―」が、資料として配付された。お話は沖繩の島をめぐる話であり、そこから浮かび上がる、来るべき人類文化についてのビジョンが語られていった。

野本さんは、平成十四年四月から沖繩に。十月からは沖繩大学で教鞭をとつておられる。

沖繩の巫女さんたちは、東西南北という方位をとても大事にする。四方拝という思いであろうか、野本さんは、まず、沖繩の最四方の島を訪問され、その四方向の島（北 伊平屋島／南 波照間島／東 大東島／西 久米島）の興味深い話となつた。

野本さん話の基本は、沖繩の、いわば閉ざされてきた離島に、文化の原型的なもの、基層的なものが存在しているということ、そして、現代の人類文明が混迷してきている時、その「シマ」に保たれてきた基層文化が、普遍的な母胎として見直されてゆくという発想だ。

シマは決して閉ざされたものではなく、海に開かれることで、世界に通じる構造を持つている。共同体的な島にこそ文化の原形があり、それが都市へと波及してゆくことが大事である、と。

野本さんは、伊平屋島の話の中で、龍のことを

次のように書いておられるが、真木さんの話にも通い、惟神かみかみだなどと思った。

——龍とは、人間の想像上の生きものなのだが、龍の働きは、いきものの生存基盤である、水と風（空気）、そして火（太陽）を司っていると考えている。／いわば、「風水火」のもとを握っているのが「龍神」というわけだ。したがって、海や河口、そして風の通り道である谷、暴風雨を抑える山（鏡岩）、さらに、火山の噴火とつながる風穴（山中の巨大な洞窟）などが、龍神の宿る聖地ということになる。——（『公評』連載文より）

真木さんのいう「龍の共同体」の世界が、より具体的なイメージで理解できる思いである。

次に大東島や久米島の話。
セイファ―御嶽ごたけは久高島の遥拝所とされるが、野本さんは、久高島のさらに東方海上の大東島に、ニライカナイ（※海の彼方の楽土）のイメージを重ねてゆく。プレートにのって、数万年後には大東島は琉球海溝に引き寄せられ、沖縄本島の下に沈んでゆく。それまでには、ニライカナイを各地に弘めておきたいものだ。

各地の洞窟や岩の話など聞くにつけ、写真映像でも見たいなと思ったが、野本さんの全身から放射される生命感、やはり島の現地で、全身で感受してはじめて伝わるものだろう。

——ぼくは、「立神」岩の前に立ち尽くしながら、「地球のいのち」そのものに触れている感で身動き出来なかつた。「立神」岩に会えたということは、いのちの根源に出会えたということと同じであった。——（『公評』連載文より）

とまで書き、話のなかでも引用朗読された実感は、写真などでは伝わらないだろう。それだからこそ、情報化されない「生の島」「生のもの」というのは、かけがえのないものだ、と、野本さんの話を聞

きながら思った。島には、そのような根源的な生命がやどり、島という地域社会での相助相愛の世界がある。それをどう現代に蘇らせるか。まずは「島」で学びたいと思う。

（野本さんの感想の言葉から）

○「好き」ということばは、いのちの根っこにあるものだ。

○「生きるとは、めぐりあうこと」と「山脈やまなみの会」の白鳥邦夫さんが言われているが、めぐりあい、つながりあい、好きになってゆくことで、いのちははぐくまれてゆくものだ。

○自殺寸前まで追い込まれていた男性が、私や李章根さん、駆けつけた人たちとの交流で立ち直り、大倭の人たちとも出会い、今は引きこもりがちな青年たちの立ち直りを支援する仕事についている。めぐりあい、つながりあい、好きになることに、生きていくいのちを実感する。

○悲しみをくぐり抜けると、その先には深い感動の世界が広がる。沖縄の各地にその世界を見ることのできる。

阿木幸男さんの話から

阿木さんは、河合塾で英語を教えておられ、その予備校で若い人を相手にゼミ（人間関係論）まで開いているユニークさで、話ぶりに味がある。

阿木さんは、ここ十年間、カンボジアで中学校の建設を支援し、現地に予備校の学生さんたちをつれての交流も行われている。その具体的な話には、聞き入ってしまう。カンボジアの子供達の話の聞いていると、悲劇的歴史や貧困のなかでも、生動している人間らしさ、こころ暖まるものが、ストリートに感じられ、憧れの念のようなものが、私のなかでわき出ていた。阿木さんのなかでも、

カンボジアの子供たちや、その子供達とふれあう予備校生たちの目の輝きが、大きな力となっているにちがいない。

阿木さんは、真木さんと野本さんの話にもふれながら、文明とはなにかを問い直すことを語る。

効率や情報、グローバルジェイションなどのアメリカ文明は、人を大事にするものではないこと。いのちを大事にする、人と人の関係性を大事にする文明こそ求められること。

外部的、量的なものではなく、身近な質的なつながりのなかに、いのちを見いだすこと。

今までの宗教教団は、信じるものを拡大する方向を目指してきたが、真実は、その方向にはないのではないか。

そして、本当のものを見いだすことが大事だが、その本当のものは、もう欧米にはなく、アジア、日本、それも沖縄とか奈良とか、足下にあるのでは……との話であった。

（阿木さんの感想の言葉から）

○職場では、喋ることよりも、若い人たちの話を聞く機会が多くなっている。聞いているだけで、結論はない。そんな中で、生徒たちもゆつくり自分を取り戻すし、豊かになる。

○カンボジアから二人の青年が来ていた。一週間、東京、名古屋にいた。都会には、夜遅くまで照明が明るく、大勢の人がいる。しかし「日本人は淋しそうですね」との感想を言っていた。カンボジアの田舎には、なにもないが、家族がいて、豊かであり、そんなカンボジアに帰りたいとの感想であった。

○カンボジア青年の挙げた日本のよかつたところ。緑の美しさ、植物の豊かさ、田んぼ、稲の植えかたがキチンとしていること、日本人のまじめさ、など。

（続く）

こもれる魂魄の地をたずねて(十八)

「おふく」の日記

平成16年8月1日

杉本 順一

忘れかけた約束

平成16年7月12日のこと、宇都宮にいた長女から夜中に電話があった。先日の日曜日に、「鳥山に行つてから頭痛がとれない」と言う。体そのものの不調か、霊障害か分からないらしい。

鳥山と聞いてすぐ、そこが那須一党の拠点であったことを思い出した。平成12年5月に栃木の那須神社に行くことに決めた時、いつか京都にある那須与市(与一)さんのお墓にも行く約束してあった。いつでも行けると思いつつも、忘れかけていた。このことを思い出し、娘に「あっ、ごめん。お父さんが悪い。与市さんの墓参り忘れてた。近い内に必ず行つてくるわ」と話していたら、「聞いている間に(頭痛が)ぬけたわ」とのこと。こんな訳で8月1日に約束を果たすことになった。以前、那須神社に行く時にもいろいろ教えてもらった林修三氏に同行をお願いした。

午前10時に京阪東福寺駅で待ち合う。林氏と私、妻と次女の4人である。駅から600メートル程歩くと即成院があった。東から西に動く遅い台風のためこの日の天気を心配していたが、雨はなく雲と風のおかげで京都は涼しい一日だった。

思ったより大きい与市さんの墓石の前に少々のお供え物をして挨拶をしていたら、夭折した法主さんの孫が心にかんで気になった。私には何の故かは定かではないが。

しばらく遊ばせてもらつて即成院を出る。院の出口で運よくタクシーをひろうことができた。上

京区の「船岡山へ」とお願いしたが運転手さんはすぐには分からなかったようだ。

与市さんのお墓と、私が大学時代に下宿していた上京区の本法寺を訪ねるのが当初の予定であった。船岡山は予定になかったが。

7月26日、私が仕事を終えて家に戻ると、大学の次女が私の布団でダウンしていた。前期テストの最終日で3科目と聞いていたから、終わってほっとしたのだろうと思つていたところ、「お父さん、まあ聞いて」と言い出した。「今日、夜中の2時頃から寝かせてくれへんねん。テストだから寝かせて、何かあるなら明日お父さんに話すから……とブチキレたら寝かせてくれた」とのこと。

私が「ふーん。何のこつちゃ」と話していたら、8月1日に京都へ行く予定のことが気になり出した。本法寺を中心にした地図を見て、すぐに目にしたのが船岡山公園であった。

直感的にここへも行かねばならない気がした。船岡山で斬首された源為義公を思い出したのだ。大倭神宮の守護霊である瑞嶽大加美(御嶽坊大僧正)の現世にあつた時の名が源為義であつたことは『ながそねの息吹』72頁にあるとおり。源為義公は、長子の源義朝や平清盛等を敵方とした保元の乱において敗者となつたのである。

平安時代中期の頃は船岡山は紫野一帯にあつて天皇の遊覧の景勝地でもあり、清少納言の『枕草子』202段に「岡は船岡」と一番に挙げられている。時代を経るとここは葬送の地となり、応仁

の乱では戦場となつた。山頂には磐座と見られる岩もあり、元は神奈備であり聖地であつたと思う。この何重にも重なつた万霊を慰霊し、お山そのものを清めるお手伝いをするのが、今回予定にはなかつた私の船岡山参りだったのか……。山頂から南の方に大和の神奈備、生駒山を間近に見ることができた。この日のお天気のお蔭である。

古代の船岡山のような聖地にもどることを願つて山を下りた。

次の目的地の本法寺は、そう遠くないので歩くことにした。途中、コーヒー店にも入り、堀川通りに向かう。寺の正面から入るために少し遠回りした。42年前の学生時代を思い出しながら。

仁王門を入つてすぐ、なつかしい本阿弥光悦手植えの松があつた。下宿させて頂いていた長谷川家は別の名前に変わっていたが、私が今回この寺に立つたのは郷愁にかられたからではない。人生の多感な頃にお世話になつたお寺が、日親上人という僧によつて創建されたと、大倭に入門してから知つたからである。

日親上人は、室町幕府六代將軍の足利義教に『立正治国論』を献じて投獄され、灼熱の鉄鍋を頭にかぶせられ舌を切られても、その信念はゆるぐことはなく、『鍋かむり日親』と呼ばれた。私にはとうてい真似のできないお方である。

学生時代の無知をお詫びしたいと、7月15日夜、拝殿で挨拶していたら「ニッシン ニッシン ムカウルナリ」(日蓮、日親を迎えるなり)、次に「ニッシン ユメノユメ ユメノユメ」と感応した。時代を超えて、霊界でお会いされるお二人のお手伝いをするのが仕事だったようだ。

この日もまた一つ小さな文化行事が終わつたと、ひそかに喜んだ私である。

表紙写真によせて

人と自然と神が共に在る……私の岳参り

鹿兒島県上尾久町 手塚賢 至

今月は趣を変え屋久島の山と今も伝承される山岳信仰についての断片を紹介します。表紙の写真は今年七月一日、屋久島第二の高峰、永田岳ながたけ（一八八六m）の山頂から撮ったもので、永田岳の東に位置する最高峰、宮之浦岳（一九三六m）周辺とその頂上の右上に満月が現れているところです。この日この永田岳山頂で目の当りにした光景は、永年屋久島の山々を登山してきた私にしても特に深い印象を残すものでした。

屋久島は「洋上アルプス」、「海に浮かぶ蓮の花」とも形容される特異な自然環境を持った山岳島です。宮之浦岳をはじめとして島の中心部に連なる七座が九州で最も高い山々で、国立公園特別保護区や世界自然遺産登録地域の指定が示すように、その貴重な自然の存在は広く知られるようになりました。豊富な雨量に育まれた森と水の島ともいえるこの島で人々は太古より生活を営んできました。ほぼ円形の島に船や空から近づくと海から急峻にせり上がっている様子が見てとれます。

はるか縄文の時代から今に至るまで人の暮らしの場は海岸沿いにわずかに広がる、川が海に注ぎ込む一帯の狭い平地に点在してきました。地形的な特色から人と山との関りは、二つの世界、集落の背後に連なる日常領域の千m前後の前岳部分と日常空間から離れた遠い異界ともいべき奥岳部分とに分かれて認識されてきました。いずれも山という垂直的な高みへの意識ですが一方では目前に広がる水平的な海とその彼方への意識、この山と海の二つの接点を分かちがたく結びつけた世界観が常に宿されてきました。

人々が海や山といった恵みを受け、抛り所とし、かつ畏敬の対象であった自然に対して抱いた心情は「岳参り」という信仰の形をもって現在でも連綿と島人の内に受け継がれています。

「岳参り」は各集落が年一回、前岳にある自分の山へ登り、山頂に納まる祠に詣でる登拝の行事、と言うより神事に近いものです。本来はそこから更に奥岳の三岳（御岳）を目指す集落あげての一大行事でした。今では簡略化され変容しつつあるようですが、登拝時にはまず海の水で身を浄め、供え物には海の若水と塩は欠かせないことから、ここには屋久島ならではの山の神と海の神の交歓の意味も窺い知れます。前岳を通過し、異界奥岳の聖地を訪ねる人と自然とが一体化したこの自然信仰は、屋久島の人が古来より感得してきた、人と自然と神が共に在ることを確かめ合う自然観に根差し、今もなお人と自然の関係性を問い続ける大切な課題を内包しているように思います。

今も各集落独自に伝承されるこの「岳参り」ですが、集落からは前岳に阻まれて奥岳を見ることは出来ません。しかし唯一永田の集落では奥岳の永田岳が前岳にさえぎられることなく直接その神々しい姿を見せてくれます。

さてこれから七月一日の永田岳登山の山行記、私自身の岳参りの記録です。

大川林道を車で花山歩道登山口（標高五〇〇m）へ。ここから登山開始。鹿之沢小屋を経て永田岳山頂を目指す行程約七時間、標高差一四〇〇mの山行。うつそうとした照葉樹林帯に始まり次第に

天然の屋久杉が現れ、鹿之沢あたりまで美事な屋久杉林が続く。「原生自然環境保全地域」や「世界遺産地域」といった極めて自然度の高いそして変化に富むルートだが、宮之浦岳を中心とした縄文杉をめぐり縦走する人で賑わうメインルートと違い、交通の不便さからか登山者が少なく、静かで落ち着いた雰囲気は十分に堪能できるのが最大の魅力だ。この日道中出会った人は下山の一人と夕方近くたどり着いた小屋に先客が一人のみ。

小屋に荷を置き身軽になって更に一時間。永田岳山頂へと急ぐ。段々と陽は西に傾き森林限界を超えたヤクザサ帯に巨大な花崗岩が織り成す壮大な景観の中を登りつめて、岩塊連なる岩峰永田岳到達。凜と空気が澄み深々とした静寂。天空に雲無く刻々と陽は海へと落ちていく。南方海上雲の上にトカラ列島の島影、西には大絶壁の山脈のかなたに永田の集落。北の海上雲厚く開聞岳の姿無し。そして東に夕日に輝く宮之浦岳。

一息ついて山頂直下の岳参りの祠に参拝。巨岩の間に出来た天然のドームに小さな江戸期の祠がある。持参した焼酎と塩、米を供えて拍手打つと小気味良い音がドームに響鳴する。

再度山頂に立つと、そこに息を呑む情景が展開していた。西に沈む強い夕陽の光を受けた私の立つ永田岳の影が宮之浦岳の山腹を少しずつ静々と這い上がっていく。男性的な山容の永田岳の神が、女性的なならかな稜線を持つ宮之浦岳の神に逢いに行くのか、徐々に徐々にくつきりと輪郭された永田岳の山頂が宮之浦岳の山頂と重なる時が来た。天文と天地の合一。その時陽は海に沈み落ち二つの神の秘め事は幕を下ろしていった。一部始終を見守っていたかのような満月が宮之浦岳の右上にあつてさえざえと光を増してくる。その月光を浴びながら私は小屋へと山道を下っていった。

寸 莎

第61回

五十嵐 章さん



もつとゆつたりと

今回登場してもらった五十嵐章さんには、昨年五月の拝殿での月次祭で、当時大きな話題になっていたSARS（新型肺炎）について丁寧な説明をしていただいたことがあるので、覚えておられる方も多いと思う。今回改めてお話しを伺って、温厚なお人柄に魅かれたばかりでなく、ウイルス学の研究者としての業績が国際的にも非常に高く評価されているのを知って、さらに尊敬の念を深めた。

ただ、研究内容の理解となると、筆者にとつて、なかなか大変だった。五十嵐さんが三人兄弟の末っ子として大阪市の天王寺で生まれたのは昭和十年七月のことである。この年に、当時の大阪帝大講師だった湯川秀樹氏は、後のノーベル賞受賞につながる中間子論を発表している。

大阪時代には、「小学校に入る前

に、大阪市立電気科学館のプラネタリウムで星座を見たり、電気の原理を応用した装置で遊んだりして、天文学や物理学に親しみを抱いた」という思い出がある。

「私の体が弱かったという理由もあって、大和小泉出身の父親 金三さんの提案で、昭和十七年には奈良の富雄へ引越した。「子供の頃から内向的で、文学書から物理書まで読書が何よりの楽しみだったが、富雄へ移つてからは野山を駆けめぐって遊ぶことも多くなつた」と当時を振り返る。学校の勉強の方は、「小学校から高校まで病欠したり読書に浸つたりしていたわりには成績はよかつた」と照れながら語ってくれた。

戦争中に一番つらかつた体験は、「十二歳上の保見さんがフィリピン沖で戦死したことで、両親は悲嘆に暮れていた」と声を落とす。

医学部に入學。「自分としては理學か工學に進みたかつたが、父親の希望が強くて醫學部を選ばざるを得なかつた」と苦笑する。昭和三十六年には大學院の博士課程に進んだのだが、「將來の専攻分野を選択するために面談していただいた深井孝之助先生との出会いが、私の運命を決定した」という。深井教授の「広くて深い博愛の精神と病原体ウイルス研究のユニークな方法」に魅かれて生涯のテーマになつたウイルスの基礎研究に入っていくことになる。

法主様の長女である輪福美夫人と出会つたのは、父親の金三さんが幼少の頃から親しかつた、当時の大倭安宿苑の今井富藏苑長を通してであつた。五十嵐さんは法主様から、「天空の運命の動きからそうなつてゐる」と言われて、「そんな馬鹿なことがあるか」と思つたが、結局二人は昭和四十年に結婚することになつた。

研究への道に進むことについて法主様に相談したところ、「研究も福祉や」と言われたことがあつた。結婚した年の四月から、大阪大學微生物病研究所防疫學部門の助手として本格的な研究者の道を歩むことになる。さらに、翌四十一年二月から一年半、バンコクのタイ国立ウイルス研究所に派遣され、デングウイルス等の熱帯性ウイルス病の病原体の研究に従事したことが、その後の研究の進路を決定的なものにした。

はじめての外國であるタイ國滞在は、「異文化に対する共感的理解を持つ貴重な体験になつた」という。

その後の、昭和四十九年四月から二年あまりの米國の大學での研究生活や、昭和五十五年四月から長崎大學熱帯醫學研究所に移籍してからの活躍や、その間の國內外での数えられない程の業績については、残念ながら紹介するスペースがない。

お話しを聞いていて五十嵐さんらしいと思つたのは、実験用マウスの命を犠牲にすることなく、蚊培養細胞を使つての研究方法を獨創的に考案されたということだ。命に対するこうした繊細な感覚を持つておられたことが、永年にわたる熱帯性ウイルス病研究の支えになつてゐたに違いないと筆者は感じた。

現在は引退されて病氣療養中であるが、「駆り立てられて忙しく動いてゐる實社會を見てゐると、もつとゆつたりと生きてゆける文明の価値観が必要」と思つてしまふ。「例えば牛の不自然な飼育方法が狂牛病を生み出し、未開の森の乱開發が新しい病原ウイルスを活化させたりするようないふことのないよう、人類はもつとつつましやかでいい」と感じるこの頃である。（聞き手 岸田哲）

あつたつ日記

8月13日 武蔵野市の伊藤千枝さんが来邑されました。
8月15日 大倭神宮において立教開宣満59年の祭典が行われました。

また交流の家ではキャンパーOBの福田三郎 典子夫妻、湯浅進 今村忠生 安本雅一さん等が故平山久 白石芳弘さんの墓参をすませた後、歓談。
8月23日 大倭大本宮月次祭。
8月28日 8月第4土曜日で弥栄踊り。超大型台風16号を横目に、朝8時にはまだ大雨。どうしようかと迷うが9時前からお日様が顔をのぞかせ準備をすめたところ、夜7時、今年も音丸会ご一統の音頭で踊りが始まる頃、月も輝いていました。

またこの夜、熊本県水俣湾の水銀汚泥埋め立て地で、石牟礼道子作の新作能「不知火」の屋外公演が行われました。水俣の高倉敦子さんの呼びかけで大倭からも岸田哲 松本モト 藤田啓子 齋藤正宏さんが参加。「水俣病の被害で亡くなった人や魚や鳥などすべての生きものや、汚染された海などの鎮魂と回生の願いを込めた奉納公演で、台風接近中で心配したが、



能に登場する龍を思わせる見事な夕焼けが忘れられない」と岸田さんの話。
8月29日 午前中、今日もお陰さまで雨も降らず弥栄踊りの後片付けができました。
8月30日 旧7月15日で東光大祭及び祖霊祭。奥津斎庭で祖霊祭が行われている間に、拝殿で東光大祭が行われ法主様のビデオを見せて頂きました。「生まれ変わりはありません」と話されたもの、「大倭神宮伝承の紀」発刊の日で大倭神宮で話されたもの、の2本立。平日でしたが、各地からのお参りの方々と拝殿は一杯でした。夕方から大倭会館で直会。

家をとび出したとのこと。9月6日 大倭神宮月次祭。この日は矢追妙月かあさんのご命日でした。夜、大倭会館で邑倭の会。大倭安宿死では(菅原園)
6月、毎週水曜日に4名ずつ登美鍼灸院の李章根さんにマッサージにに来てもらい大変好評。(須加宮寮)
8月15日 液晶プロジェクトで「ラッシュ アワー」上映。皆よく笑いました。(長管根寮)
8月28日 弥栄踊りに15名の皆さんが参加しました。(八重垣園)
9月1日 コーラスクラブで「奈良ばやし」「汽車」等の合唱を楽しみました。

あんない

* 月次祭(大倭神宮)
10月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。
* 大倭会主催第四三一回禊会
10月10日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。(11月の禊会は文化講演会となります)
* 月次祭(大倭神宮)
10月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。
* 月次祭(大倭大本宮)
10月23日(土) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

第281回大倭会文化行事

秋の一泊旅行のご案内

～鎌倉に栄枯盛衰の跡を訪ねる～

日時 H16年10/31(日)～11/1(月)
集合 京都駅(詳細は追って参加者に連絡します)
行き先 鎌倉・江ノ島方面
[鶴ヶ岡八幡宮・鎌倉宮・日蓮上人辻説法故地など]
お泊り 江ノ島 岩本楼
神奈川県藤沢市江ノ島2-2-7
電話:0466-26-4121
定員 50名程度
費用 45,000円(往復新幹線使用)
鎌倉ではジャンボタクシーで回る予定です。
申込み 10月10日までに世話人へ
*10月10日禊会で勉強会をします。
世話人 湯浅芳郎(電話0742-48-3389)

<田んぼ通信>

稲刈りと栴掛けのご案内

10月11日(祝) 午前9時30分～

実りの秋が近づいてきました。変則の天候にもめげず、稲は元気です。ふるってご参加下さい。

服装

長袖・長ズボン・長靴。帽子とタオルは各自用意下さい。軍手と鎌は用意してあります。

昼食 飲み物

ご用意します。(差し入れ歓迎)

連絡先 Tel 0742-41-4615 (双葉館)

第16回 大倭会文化講演会

講師 成瀬匡章氏

テーマ 「古代人の水と森への想い」

— 吉野 宮の平遺跡発掘にかかわって —

日時 平成16年11月14日(日) 午後2時より

場所 大倭紫陽花邑 拝殿

※ 講演会終了後、大倭会館にて懇親会(懇親会会費1,000円)

入場無料

講師プロフィール

三重県出身。4年前、宮の平遺跡の発掘調査に参加して奈良県吉野郡川上村に滞在した。大学では日本古代史を専攻。山で生活する人の生活、文化、宗教観などに関心があり博物館の仕事がしたかったと言う。現在、川上村の「森と水の源流館」職員。